

秋名・幾里集落

秋名・幾里集落は、奄美諸島の海辺にある集落の多くを特徴づける伝統、信仰、習慣、そして自然と調和した暮らし方を体現しています。

神の道

日本のアニミズム的な民間信仰は、自然の全ての要素に神が宿っているという考えにもとづいています。この自然界への深い畏敬の念は、今でも琉球諸島全域に強く見られます。地域の信仰の最も象徴的に示すものの一つが、集落を通る「カミチ」(神の道)という山の神々が海まで下るための経路です。

自然との共生

集落の人々の信仰は、環境に対する姿勢と自然のリズムに沿った暮らし方に反映されています。秋名・幾里集落は、人々が広い水田で稲作を行ない、大量の渡り鳥が水田で休憩と食餌のために立ち寄る奄美大島の数少ない場所のひとつです。地元の人々が日常的に食べるものには魚、エビ、タコ、貝とともに近隣の山林で獲れるイノシシなどがあります。集落の人々はこれらの自然の恵みを受け取る時神に感謝を捧げ、豊かな収穫を願って収穫時期を通じて祭祀を行います。

古い伝統を守る

多くの琉球諸島の地方地域と同様、奄美の集落の伝統行事は旧暦に従って行われます。平瀬マンカイという祭りはアラセツ、つまり旧暦 8 月最初の丙の日に催されます。

この祭りでは、集落の男性と子供はショチョガマという儀式に参加します。ショチョガマの参加者は藁葺小屋の上に立ち、この小屋を揺り動かして倒します。小屋が倒れる方向でこの地区が豊作に恵まれるか否かが分かると言われています。夕方には白い衣装を纏った 5 人の祝女（ノロ）が海岸の大きな岩の上に集い、海のかなたのネリヤという王国に住んでいるとされる守護神たちに向かって祈りを唱えます。このお祭りは少なくとも 450 年以上前から行われており、重要無形文化財に指定されています。